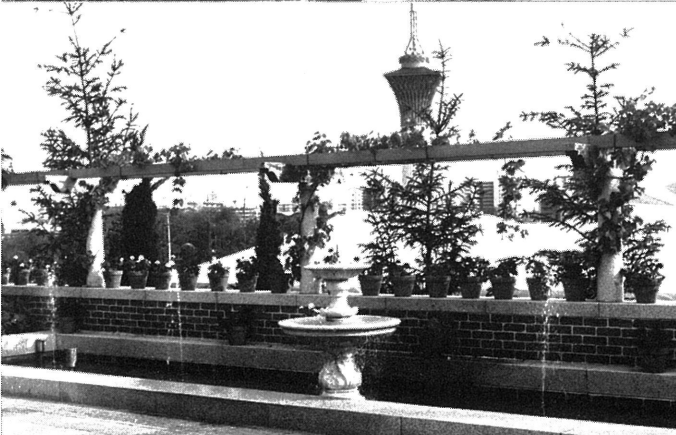
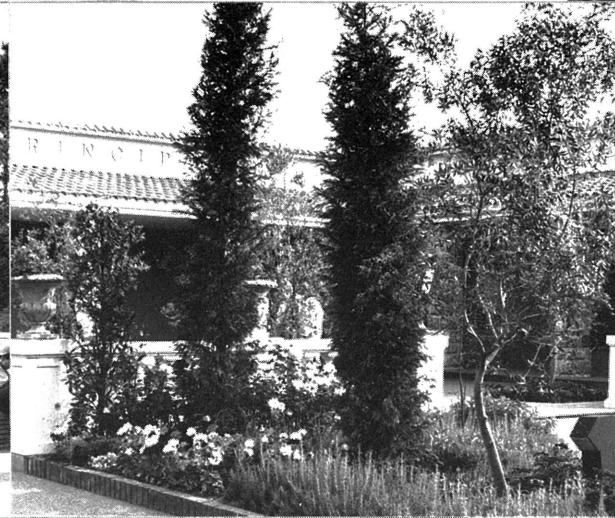
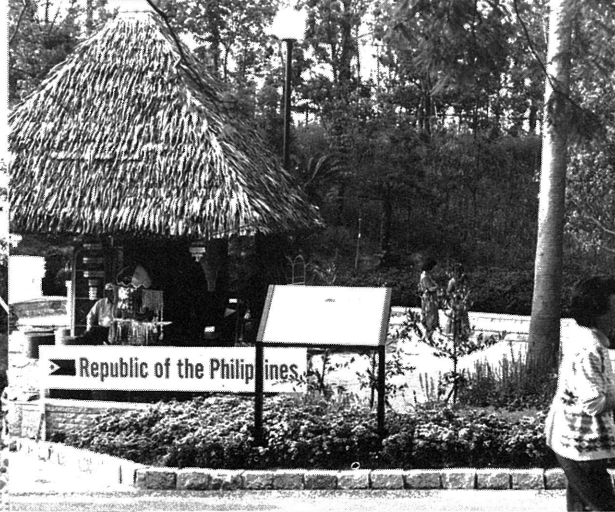


国際花と緑の博覧会・大阪鶴見緑地

花と緑の祭典「人間と自然の共生」をテーマにした花の万博が大阪の鶴見緑地で4月1日に開幕されて以来、さまざまな話題を提供してきたが、もう2カ月余りを残すのみとなった。183日間、2千万人の入場者を見込んでいるが、7月末日には1370万人を突破している。2千万人といえば2家族に1人は花博を見たことになる。花と緑への関心の深さをうかがえるのではないか。世界から80カ国、55国際機関と国内の300余りの企業、団体が出展し、140haの会場は花々にうめつくされている。その費用は約2千億円という。

花博の目指したものは「人間と自然の共生」である。人間にとって花とはなにか、花と緑と人間が共生するとはどういうことか、そんな問いを発しているのである。花というものは本来美しさのシンボルである。しかし花を見て美しさ、心地よさを感じられない人々がいるとすれば、この時代は病んでいる。貧しかった時代は山野の花々に心をよせてきた。花の美しさは心を豊かにするものだ。会場は山、野原、街の各エリアに春、夏、秋の花と緑につつまれる。そしてさまざまな催事が入場者を楽しませてくれるだろう。写真下は世界最大の花「ラフレシア」と推定樹齢1500年の屋久杉の根株。ミクルの国。写真右は各国の庭園。





花の万博の意義と今後の街づくり



服部 明世

(建設省国際花と緑の博覧会推進室長)

1 わが国における国際博覧会

今から20年前、1970年、大阪千里丘陵において日本で初めての国際博覧会が開催された。日本万国博覧会（大阪万博）である。「人類の進歩と調和」をテーマに、太陽の塔、月の石に象徴された大阪万博は、半年間に6,400万人余、万博史上記録的な人を集めた。何と日本人の2人に1人は会場を訪れたことになる。

戦後四半世紀を経て、経済的に成長したわが国は大阪万博の時期から本格的な国際化時代への道に大きく踏み出すとともに、万博で生み出された新しい技術、商品文化が全国に普及して行った。民間の企業も、グループを組んで積極的に万博に参加した。さらに、これを縁に企業グループ間の結束が強化されるという副次効果もあった。

大阪の中心市街地から鬼門とされた万博会場は博覧会終了後は記念公園として残され、隣接の千里ニュータウンと一体となって、大阪の新しい一大文化、コミュニティーゾーンを形成することになった。

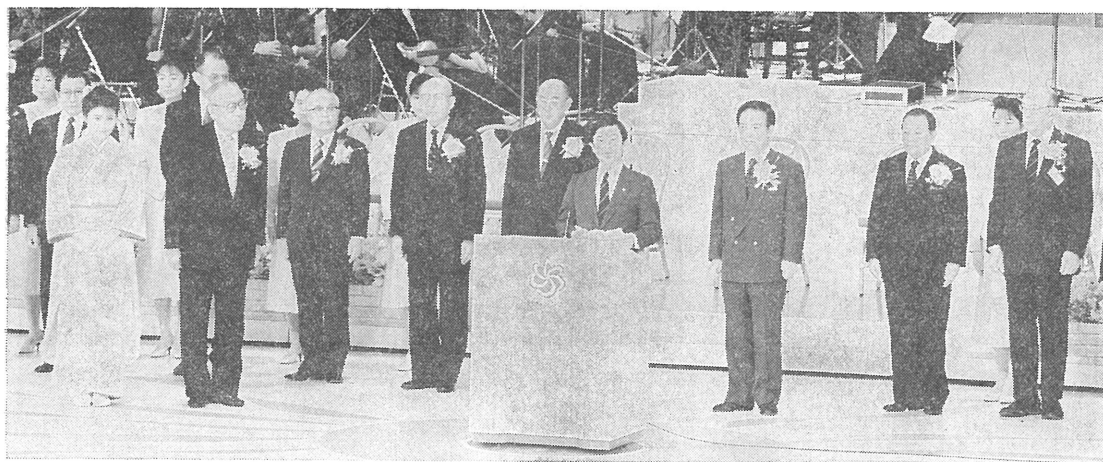
大阪万博から5年後、1975年、沖縄の本土復帰

を記念し、「海—その望ましい未来」をテーマとして開催された沖縄国際海洋博覧会は、わが国戦後の1ページを終えるとともに、沖縄における道路、公園、下水道、港湾等の公共投資と、沖縄振興への起爆剤的役割を有するものであった。この博覧会を契機に、国の内外から、沖縄を訪れる人は増え、その後の発展の基礎づくりが成されたといえよう。

海洋博の終了後は、国営沖縄海洋博覧会記念公園（その後、首里地区を加え、沖縄記念公園と改称）として再整備され、今や沖縄の観光振興を支える大きな目玉の一つとなっている。

さらにそれから10年、1985年、茨城県筑波で開催された国際技術博覧会は、「人間、居住、環境と科学技術」をテーマに、天然資源の少ないわが国が、科学技術を通じて国際社会に貢献するという、新しい方向を示すものであり、21世紀に向けての人間、居住、環境のあるべき姿を求めようとするものであった。

これら3度の国際博覧会が、順調な成果を挙げることが出来たため、地域開発、地域振興、活性化のためのイベントとして、博覧会の開催は絶対的な地位を占めることとなった。



開会式での皇太子殿下（花の万博名誉総裁）のお言葉。

2 国際花と緑の博覧会・花の万博

花の万博は、大阪鶴見緑地で、本年4月1日から半年間の幕をあけ、既に会期の3分の2を経過した。花の万博は日本で4度目で、かつ今世紀最後の国際博であり、同時に国際園芸家協会の認定を受けた、東洋で初めての大国際園芸博である。

これまで、ヨーロッパを中心に開催されてきた伝統的園芸博では、国際園芸家協会の目的とするところもあって、園芸見本市的な面を持っていた。しかしながら、前回、1984年イギリスのリバプールでの開催の頃から、園芸を中心としながらも、関連分野の参加を得るなど、転換拡張の兆しが見えてきた。

園芸博がポピュラーとなり、ヨーロッパ地域だけでなく、世界中で開催されるようになってくると、従来からいわれてきた所謂伝統的園芸博の内容が、開催地（国）及び時代の要請として新たな事情を加味し、もう少し広がったものとなるのも当然であろう。

21世紀を目前に控えた今日、我々の生活を向上させるべき文明の発達には、一方では地球上に様々な環境問題を引き起こしている。世界各地では、

人類共通の財産である森林が伐採され、恐ろしい速度で砂漠化が進行している。化石燃料の大量消費が、地球の温暖化や酸性雨をもたらし、フロンガスの使用がオゾン層を破壊しつつあるという。

科学や文明、産業は自然に挑戦し、対立して発達するものと考えられているのではなからうか。

我々は、人間の精神と肉体にとって、花と緑の自然環境が必要不可欠であることを、忘れてしまっていないだろうか。

今回、花の万博では、これ等の課題を、開催国である日本と今日的時代の要請として、狭義の園芸博の枠に加味して構成し、緑豊かな生活環境の創造を目指し、花と緑を通して21世紀の人、街、日本、世界まで考えようとしたものである。

この博覧会を一人でも多くの人に見てもらいたいのであるが、開会後82日目の去る6月20日には入場者数も1,000万人を突破し、順調に推移を見ている。

天皇・皇后両陛下の行幸啓



3 花の万博の意義

(1) 博覧会として

これまでの3回の国際博を含め、昨年まで数多く開催された博覧会は、産業振興、新しい科学技術の発展を目的とした、無機質のものが主流であった。博覧会会場では、敷地いっぱいに建設されたパビリオンで埋められ、外部空間も、ほとんどペープされていた。観賞することは、パビリオンを巡ることであり、めずらしい土産物を買求めることであった。これに対して、今回の花の万博は、花と緑に代表される自然と人間の共生をテーマにした有機質といえよう。会場を注意深く見てもらえば、お分かりいただけると思うが、街のエリアのパビリオンは建ぺい率50%以下となっている。外部空間には、花壇あり、テラスありで、色々工夫されている。また山のエリア、野原のエリアは、ほとんどが屋外の出展、展示であり、行列を作って待たないと入館できない、見れない、といった形式になっていない。

相変わらず入場者は、パビリオンに長い行列を作っている。土産物売場の販売高も、予想を大きく上まわっていると聞く。しかしながら、従来の博覧会に比べて、出展、展示の様式、入場者の行動態様は、確実に変化している。花の万博は、博覧会の新しい方向を示唆しているといえよう。

(2) 時代背景として

近年、わが国の自然環境の荒廃、都市における緑の喪失は著しいものがあり、全国で緑豊かな街づくりが叫ばれ、また地球の砂漠化、温暖化など地球環境の問題が大きく取り上げられている。

建設省をはじめとして、国においては都市緑化国土緑化に、各種施策を展開してきたところである。昭和59年、当時の中曽根総理は、緑3倍増構想を提唱し、東京都では鈴木知事が、緑の倍増計画を発表した。地方では、昭和61年、熊本県で細川知事が、緑の3倍増計画を宣言した。

一方、アメリカでは、1960年代にジョンソン大統領が、都市のオープンスペース計画と国土美化運動を展開し、最近では、ブッシュ大統領が、10億本の植樹計画に着手したと発表されている。

このような時代の流れのなかで、東洋で初めて開催された花の万博は、花と緑に代表される自然が、人間の肉体、精神にとって、いかに大切なものであるかを理解し、21世紀に向かって緑豊かな潤いのある家庭、街（都市）、国土づくりへの促進剂的役割を果たすものといえよう。

建設省では、緑豊かな街づくりの中心的施策として、五箇年計画に基づく都市公園整備を進めてきた。来年度からは第5次の五箇年計画に改訂されるが、飛躍的な計画にしたいところである。



野原のエリア、花の谷

4 街づくりへの展開

博覧会が街づくりにもたらしたものとしては、道路、鉄道等、関連公共施設整備に典型例を見ることができる。花の万博でも、約2,000億円の投資がなされている。しかし、今後の街づくりに影響を及ぼすのは、ハードなものよりソフトな面ではないだろうか。

花の万博には、2,000万人以上の入場者が見込まれている。計算上からすると、2家族に1人は見ることになる。これだけ多くの人々が花と緑を愛し、好きになり、関心を持ってもらい、花の万博の意義を理解してもらうことができれば、緑豊かな潤いのある生活環境づくりへ、大きく前進することとなる。

花の万博では、世界から80か国、55国際機関とともに、国内から300余の企業、団体の出展がある。特にこの中には、これまでの博覧会になかったこととして、全都道府県及び全政令指定都市から出展していただいている。従来、緑豊かな街づくりは、都市緑化、都市公園の整備、公共公益施設の緑化、民有地の緑化等々、主として地方公共団体が主体となって、推進されてきたところである。

花の万博に参加されている自治体を中心となり花と緑に関心の高まった市民も一体となって、人間にとってより快適な緑豊かな環境づくりが、一層推進されることを期待したい。

5 むすびに代えて

花の万博は、既に会期の3分の2を過ぎた。開会後の印象的な事例をいくつか紹介して、むすびに代えよう。

その1。花の万博協会の植物を担当する課には、頻繁に電話が入る。若い人から高齢者の方まで、年齢はまちまち。内容は、会場内の花の問い合わせから、植物への水のやりすぎ又は不足の指摘、花の取り替え時期の忠告など、花や樹木に対する関心が極めて高い。

その2。日本では、博覧会のパビリオンに人気がある。花の万博でも、街のエリアのパビリオンは10～15分程度の映像を見るために、2～3時間も待つこととなったりする。それに比べ、山のエリアの庭園を案内すると、「やっぱり花の万博はこれまでの博覧会と一味違う」「季節が変わったら、もう一度きたいね」と大好評。

その3。特に、会場周辺の家では、全期間入場券の購入者が多い。暇さえあれば、デパートや食べ歩きに出掛けていた奥様方は、このところ花の万博詣で。子供も学校から帰ると、イベントを見に会場へ。食後の団欒は、花の話、イベントの話で会話がはずむ。父親の方も、休みには会場へ出向かないと、会話について行けない状態。最近では、食卓に花が飾られるようになった家も多いとか。